

# インクルーシブ教育システム下において児童生徒の健康問題へ適切に対応できる教員養成カリキュラムの開発

—医教連携による学際的講義・実習の充実を目指して—

○榎木暢子\*

中野広輔\*\*

苅田知則\*\*

吉松靖文\*\*

加藤公史\*\*\*

(愛媛大学大学院教育学研究科)\* (愛媛大学教育学部)\*\* (愛媛大学教育学部附属特別支援学校)\*\*\*

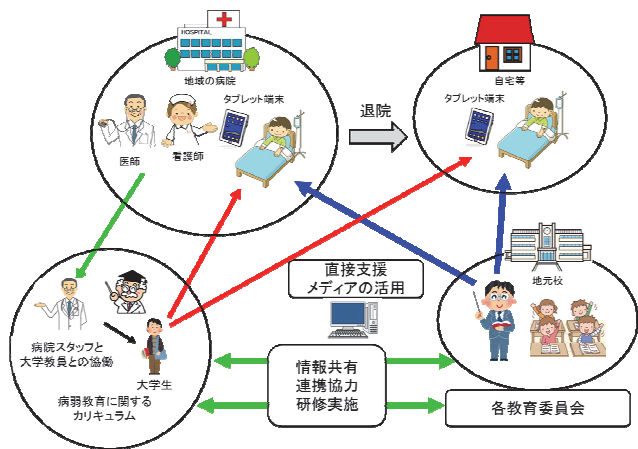
KEY WORDS: インクルーシブ教育システム、健康問題、教員養成カリキュラム

## (目的)

文部科学省の報告によると、毎年約4万人の小中学生が病気や障害を理由に、長期欠席を余儀なくされている。小児がん等の疾病による長期入院も含まれており、病弱児への対応(病弱教育)は、特別支援教育担当教員や養護教諭のみならず、通常の学級(小中学校、高等学校等)の教員も直面しうる問題である。一方で、病弱児への具体的な対応については、教員養成段階で学習/学修する機会がほとんどなかった。本研究では、教職を目指す本学の全学生に対して、インクルーシブ教育システム下において、長期欠席を含む病弱児童生徒の健康問題へ適切に対応できる教員を養成するカリキュラム(病弱関連科目群・病弱教育実習)を開発し精微化することを目的とする

## (方法)

本取組の概念図は以下の通りである。期間は平成27～28年度で、下記の方法でカリキュラム開発を進め、論理的考察を行った。



## (1) 病弱関連科目のシラバス検討

学校教育教員養成課程の学生が受講することを想定し、病弱関連科目のシラバスを見直し、一部を学校教員養成課程及び養護教諭養成課程の学生が当該科目を受講できるよう、カリキュラムマップに位置付ける。その際、当該科目の受講生にルーブリック評価を実施し、授業内容を検討する。

## (2) 病弱教育実習の実施・拡大

近隣の病院に長期入院しており、教育からの長期離脱を余儀なくされている児童生徒を対象に、病弱実習を行う。実習期間等は定めず、病気療養児のニーズに合わせて随時実施する。実習受け入れ医療機関及び実習生の拡大を図る

## (3) ICT機器を活用した病気療養児への遠隔支援の試行

遠隔操作が可能な双方向コミュニケーションロボットを活用し、「どこでも教室」のシステムを検討する。

## (4) シンポジウムの開催

特殊教育学会において自主シンポジウムを開催し、学識経験者等から当該カリキュラムに対する示唆を得た。

## (結果)

### (1) 病弱関連科目のシラバス検討

「発達障害児の健康教育」及び「発達障害児の教育実践論」を統合し、「インクルーシブ教育実践論」を創設するとともに、平成28年度入学生より教職科目として教員養成カリキュラムに位置付けるとともに、医学部看護科養護教諭養成課程の学生も受講可能とした。参加学生のルーブリック評価では医学的知識だけでなく、学習支援や養護教諭と学級担任の連携、地域との連携などの自己評価の変化量が大きかった。

### (2) 病弱教育実習の実施

実習に参加する学生は特別支援学校教員養成課程から、学校教育教員養成課程、大学院生、教職大学院生へと広がった。また、受け入れ病院も年々増え、大学近隣病院のニーズに応えられるようになった。県及び市の教育委員会も理解を示し、連携強化を行っていく方向で確認された。

### (3) ICT機器を活用した病気療養児への遠隔支援の試行

28年度は遠隔地双方向コミュニケーション支援ロボットの利用を試みたが、インターネット回線の状況により不具合が生じやすく、学習者の使用にも課題があったため、他の方法を試みることとなり、29年度はタブレット端末を活用することとした。タブレット端末の活用についてはさらなる検討が必要である。

## (総合考察)

健康問題のある児童生徒への対応として、教育学部の教職科目に「インクルーシブ教育実践論」を位置付けた。

シラバス検討から導き出されるカリキュラムの理念として、①深い学びを促すための考え方、手法の理解、②校内連携、関係諸機関との連携、③当事者による実感を伴う知、が挙げられた。この科目は医学部の養護教諭養成課程の学生も受講可能であり、全学で健康問題に対応しうる教員養成カリキュラムを共有することができるようになった。また、近隣の病院や教育委員会との連携により、病気の子どもたちへの学習保障が可能な体制を築き上げつつある。本研究は地域における国立総合大学の役割として重要な取り組みであり、地域の中で子どもたちの育ちを支えていくことに大きく寄与し得るであろう。地方の一大学の取り組みに終わることなく、全国の教員養成系大学に広がっていくよう、働きかけていくことも必要であろう。

## (付記)

本研究は平成27年度・28年度愛媛大学教育改革促進事業の一部である。

(KASHIKI Nagako, NAKANO Kosuke, KARITA Tomonori, YOSHIMATSU Yasufumi, KATO Koji)